

『官話指南』の多様性

——中国語教材から国語教材

氷 野 善 寛

A multiplicity of Kuan Hua Chih nan

— Chinese textbooks intended for non-native's use and native's use

HINO Yoshihiro

A Chinese textbook titled the *Kuan Hua Chih Nan* has been used by many Japanese and Western learners of Chinese since its publication in 1882. The textbook was also translated into various Chinese dialects including Shanghai dialect and Cantonese. Furthermore, the Chinese textbook, originally designed for foreigners, was revised and published in around 1918 as a textbook for Chinese people under different titles. In other words, the *Kuan Hua Chih Nan* also served as a textbook for Chinese people in the early 1900s to learn Mandarin Chinese or the common speech. This paper focuses on the *Kuan Hua Chih Nan* as a Chinese textbook published for Chinese people and examines the *Kuan Hua Chih Nan* and textbooks derived from the *Kuan Hua Chih Nan*.

キーワード：『官話指南』、国語教育、北京語教材、中国語学習

はじめに

『官話指南』は1882（明治15）年¹⁾に出版され、長年にわたり日本人や欧米人に使用されてきた中国語学習用の教科書である。六角恒廣著の『中国語書誌』（以下『書誌』）には詳細な書誌情報が掲載されており、同氏編の『中国語教本類集成』（以下『集成』）には影印も掲載されている。また上海語や広東語といった方言に翻訳されたことも知られている。この外国人にとっての中国語教科書はさらに1918年前

1) 『官話指南』のバージョンのうちどれが初版本であるかということについては断定することは、刊年が記載されているものとそうでないものがあり断定することはできない。凡例に1881（明治14）年12月という記載があること、そして刊年が記載されているものは1882（明治15）年以降になっていることから1881（明治14）14年12月から遅くとも1882（明治15）年に出版されたことが分かる。そこで本論では刊年記載のある1882（明治15）年を仮に初版の刊行年としている。

後に『教科適用訂正官話指南』『訂正官話指南』『改良民国官話指南』など書名で再編集され中国人向けの教材として出版された。つまり『官話指南』は1900年代初頭の中国人にとっては、「北京語」あるいは「国語²⁾」の教科書としての一面を持っていたのである。本論文では、これまでの成果を踏まえつつ、今回の調査で発見することができた民国期に上海、福建、広東などの諸地域で「国語」学習用として使用されたと考えられる『官話指南』と、これまで紹介されてきた『官話指南』のいずれとも異なる版本についてあわせて紹介し、『官話指南』とそれから派生した教材を整理する。

一. 『官話指南』とは

『官話指南』は呉啓太・鄭永邦の共編により、楊龍太郎を出版人として出版された「日本人の手になる最初の中国語会話書³⁾」で、序文・凡例・目録・卷之一「應對須知」・卷之二「官商吐屬」・卷之三「使令通話」・卷之四「官話問答」の四卷一冊からなる。序文は清国公使館の田邊太一による序と、黄裕壽と金國璞の拜序からなる。その後に呉啓太と鄭永邦による凡例と続く。凡例では中国に来て3年間中国語を学習した経験から本書を編纂したこと、中国語を学ぶ際の注意点などが記載されている。本書は上海で出版され、日本国内はもとより、英語やフランス語に翻訳され、海外で幅広く使われた教材としても知られている。また日本国内では1903年には拜序を書いた金國璞により改訂され、『改訂官話指南』として文求堂から出版されている。

二. 『官話指南』の版本の多様性

本章では『官話指南』について、中国語学習書、方言学習書、国語学習書の三つに分類して『官話指南』本書及びそこから派生したものについて整理する。『官話指南』の基本的な書誌情報については、上述の六角恒廣著の『中国語書誌』や鱒沢1997⁴⁾の成果がある。ここではそれらの成果を踏まえつつ、新たに発見された版本を含めて掲載することとする。

各書籍についておおよそ次のように整理する。

- ①書名
- ②編著者
- ③発行者

2) 「北京語」あるいは「国語」学習としたのは、後述の中国人向けに出版された『官話指南』が使用されていた地域が主に非官話地域であり、主に共通語としての北京語を意図的に学習しようとしていたと考察できる点と、『訂正官話指南』の重訂者である郎秀川が編纂した『最新官話捷中捷』で「国語」学習として『官話指南』を利用しているという記載があったためである。そのため本論では便宜的に外国人による官話学習を「中国語学習」、非官話地域の中国人にとっての官話学習を「北京語」あるいは「国語」学習と称することとする。

3) 『中国語学新辞典』（光生館、1970年再版）255-256頁。

4) 鱒沢彰夫『『官話指南』そして商務印書館の日中合辨解消』『中国文学研究』23号、1997年12月

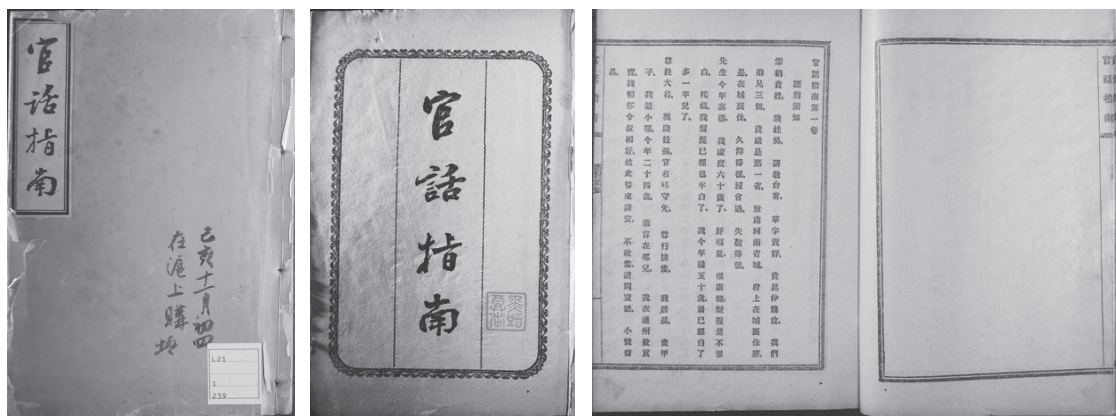
- ④刊年
- ⑤印刷地
- ⑥形態
- ⑦封面及び奥付情報
- ⑧所蔵
- ⑨備考

「書名」、「編著者」、「発行者」については記載があるものについてはそのまま記載した。書名の後ろに（ ）として（英訳版）のようにしているのは筆者による註である。「刊年」については封面、序、奥付に記載のあるものを採用した。印刷地についても同様である。「形態」については実際に入手できたものについては実寸を計測し、入手できなかったものについては所蔵図書館の書誌を利用した。「封面」及び「奥付」については、とりわけ中国語学習書としての『官話指南』については初版がどれか不明な点もあるため、そのまま転写している。全ての図書館の所蔵を網羅することはできないので代表的な所蔵場所を記載している。また影印されて収録されている書籍がある場合にはその書籍名も記載している。「備考」には筆者が、気がついた点などを記入している。また図書館で所蔵が少ないもの、あるいは個人蔵書しかないものについては可能な限り、書籍の画像を掲載した。

1. 中国語学習書としての『官話指南』

ここでは1903年の『改訂官話指南』出版以前に出版された外国人が中国語学習に利用した『官話指南』についてまとめる。

〔1〕-1 官話指南



関西大学図書館所蔵本

編著者：呉啓太・鄭永邦

発行者：楊龍太郎

刊 年：記載無、1881（明治14）年12月自序

印刷地：記載無

形態：線装本、4巻1冊、99丁（本文）、21.5×14.7cm、半葉12行27字

封面：（空白）／官話指南／（空白）⁵⁾

奥付：在清國北京大日本國公使館

長崎縣士族呉啓太 東京府士族鄭永邦 全編著

東京下谷區西黒門町貳番地鄭永甯邸内寄留

長縣崎平民 楊龍太郎 出版

（※下線は筆者による、以下全て同じ）

所蔵：関西大学図書館（請求記号：L21**1*239）

『集成』第1集第2巻

備考：表紙は厚手のレンガ色紙。関西大学の所蔵本には内藤湖南による「己亥十一月初四 在滬上購」という書込みがあり、この書込みから少なくとも1899年以前に上海でこの版本が流通していたことが分かる。『書誌』No.15。

〔1〕-2 官話指南

編著者：呉啓太・鄭永邦

発行者：楊龍太郎

刊年：1882（明治15）年11月

印刷地：上海美華書館

形態：線装本、4巻1冊、135丁（本文）、18.0×12.0cm、半葉10行23字

封面：明治壬午歳夏月鐫／官話指南／鶴江延陵氏蔵板

封面裏：光緒壬午孟夏月上海美華書館印

奥付：在清國北京大日本國公使館

長崎縣士族 呉啓太 長崎縣下長崎區爐粕町十九番戸

東京府士族 鄭永邦 東京下谷區西黒門町貳番地 全編著

長崎縣平民

東京下谷區西黒門町貳番地鄭永甯邸内寄留 楊龍太郎 出版

明治15年11月6日出版御届

全年全月出版

所蔵：国会図書館（YDM82300（マイクロフィッシュ）／5-191）

国立公文書館内閣文庫（請求番号 278-0140）

備考：国立公文書館の所蔵本は表紙や中身は破損箇所が多く、文字を読み取ることができない箇所が多かったが、奥付に明治15年11月6日出版御届全年全月出版とされていることから、国会図書館のものと同じと考えて間違いない。レンガ色の表紙。国立公文書館本には定價八十錢の朱印が押されている。なお、刊年と著者の後ろの住所（下線箇所）は明らかに別の字体で

5) 斜線／は改行を示す。掲載方法は鱗沢1997の方法による。

記入されたものである。また同じ長崎の「崎」も「崎」と「寄」になっている。これらのことから美華書館で印刷したのちに日本国内で追記したものと考えられる。

〔1〕-3 官話指南

編著者：呉啓太・鄭永邦

発行者：楊龍太郎

刊 年：明治19年2月再版

印刷地：上海脩文活版館

形 態：線装本、4巻1冊、99丁（本文）21.3×14.9cm、半葉12行26字

封 面：明治壬午歳夏月鐫／官話指南／鶴江延陵氏蔵板

封面裏：明治十七年上海脩文活版館再印

奥 付：在清國北京大日本國公使館

長崎縣士族 呉啓太 長崎縣下長崎區爐粕町十四番戸

東京府士族 鄭永邦 東京下谷區西黒門町二番地 全編著

東京下谷區西黒門町貳番地鄭永南邸内寄留

長縣崎平民 楊龍太郎 出版

明治15年11月6日出版御届

全年全月出版

明治19年1月7日再版御届

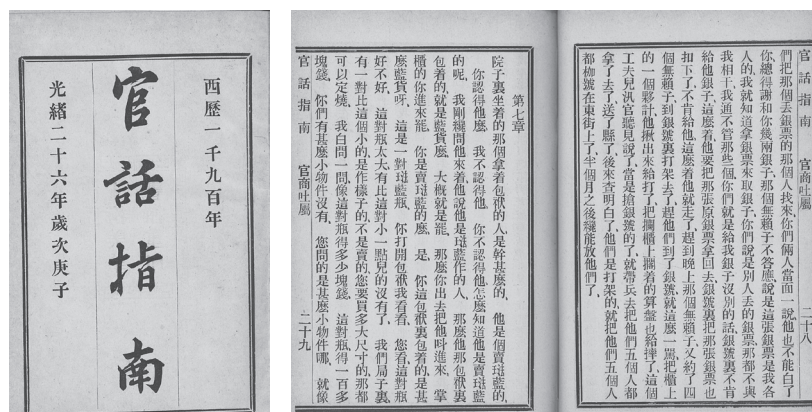
全年2月再版

所 蔵：国会図書館（YDM82301（マイクロフィッシュ）、特56-852）

国立公文書館内閣文庫（請求番号 278-0139）

備 考：国立公文書館蔵本にはさらに朱印で定價八十銭とある。また奥付で「長縣崎」となっている点や字体が異なる点が〔1〕-1と同じである。

〔1〕-4 官話指南（重印本）



尾崎文庫所蔵本

編著者：呉啓太・鄭永邦

発行者：楊龍太郎

刊 年：1900年

印刷地：上海美華書院（American Presbyterian Mission Press）

形 態：線装本、212頁、18.6×12.5cm、半葉11行27字

封 面：西歴一千九百年／官話指南／光緒二十六年歲次庚子

封面裏：上海美華書館重印

奥 付：在清國北京大日本国公使館

長崎縣士族呉啓太

東京府士族鄭永邦 全編著

東京下谷區西黒門町貳番地鄭永甯邸内寄留

長崎縣平民 楊龍太郎 出版

所 蔵：尾崎文庫⁶⁾ (No.119)

備 考：『書誌』No.21

〔1〕-5 官話指南（重印本）

『書誌』No.21に Kelly & Walsh Limited 版の封面が掲載されていたが、1903年版の所蔵を確認することができなかったため、封面①と刊年以外は1923年版（浙江図書館所蔵本）の情報による。

編著者：呉啓太・鄭永邦

発行者：楊龍太郎

刊 年：1903年（1923年）

印刷地：Kelly & Walsh Limited

形 態：洋装、211頁、半頁11行27字

封 面：①西歴一千九百零三年／官話指南／光緒二十九年歲次癸卯

②西歴一千九百二十三年／官話指南／民国十二年歲次癸亥

奥 付：在清國北京大日本国公使館

長崎縣士族呉啓太

東京府士族鄭永邦 全編著

東京下谷區西黒門町貳番地鄭永甯邸内寄留

長崎縣平民 楊龍太郎 出版

所 蔵：浙江図書館（1923年版）

備 考：『書誌』No.21。浙江図書館に Kelly&Walsh 版が所蔵されている。『書誌』によると No.21の二冊は「刊年・発行所は異なっているが、序文・奥付を含めて初版全部を四六判に収めて装丁

6) 正式な名称ではないが、関西大学アジア文化交流研究センターに所蔵されている尾崎實氏の旧蔵書を指す。まとめて所蔵されているのでここでは便宜的にこのように称する。（ ）内の数字は尾崎文庫の整理番号。

も背文字も同じ、内容の版式も活字も同じである」とある。この点について1923年版でも確認したところ同様であった。浙江図書館蔵本（1923年）はKelly & Walshから出版されている英訳版と同じ赤ぶちの装丁で、表紙に赤字で『官話指南』と記載されている。

〔1〕-6 官話指南（重印本）

編著者：呉啓太・鄭永邦

発行者：楊龍太郎

刊 年：1900年福州美華書院から重印

印刷地：福州美華書院

形 態：線装本、93丁、21cm、半葉11行35字

封 面：主降生一千九百年／官話指南／光緒二十六年 福州美華書局活板

奥 付：在清國北京大日本国公使館

長崎縣士族呉啓太

東京府士族鄭永邦 全編著

東京下谷區西黒門町貳番地鄭永南邸内寄留

長崎縣平民 楊龍太郎 出版

所 蔵：関西大学図書館泊園文庫

備 考：〔1〕-4と〔1〕-5と同系統のものであると考えられる。藤澤黄鵠旧蔵書で学習時の書き入れがある⁷⁾。さらに「明治辛丑六月於清國上海獲之」とあることから、1901年には福州で印刷されたものが上海で販売されていたことが分かる。

以上で紹介した『官話指南』以外に韓国學中央研究院⁸⁾で『官話指南』の電子データが公開されている。この電子データには封面と奥付情報が記載されておらず、半葉14行×30字であり、〔1〕-1～〔1〕-6の『官話指南』に形式的に合致するものはない。また、この『官話指南』は全ページにわたり韓国語による音注が手書きで書き入れられている。

2. 中国語学習書としての『官話指南』からの派生

本節では上述のオリジナルの『官話指南』に翻訳や対訳など何らかの工夫がなされたものから、改訂版までを整理の対象とする。

〔2〕-1 官話指南

編著者：九江書會

7) 1974日下恒夫「清代南京官話方言の一斑-泊園文庫蔵《官話指南》の書き入れ」『関西大学中国文学会紀要』20-47頁において、書き入れの調査が行われた対象本である。

8) 韓国學中央研究院<http://www.aks.ac.kr/aks/default.aspx>

発行者：九江書局活字印（Central china press, kiukiang）

刊 年：1893年

印刷地：九江

形 態：190頁、10行×32字

封 面：西歴一千八百九十三年 九江書會著

官話指南

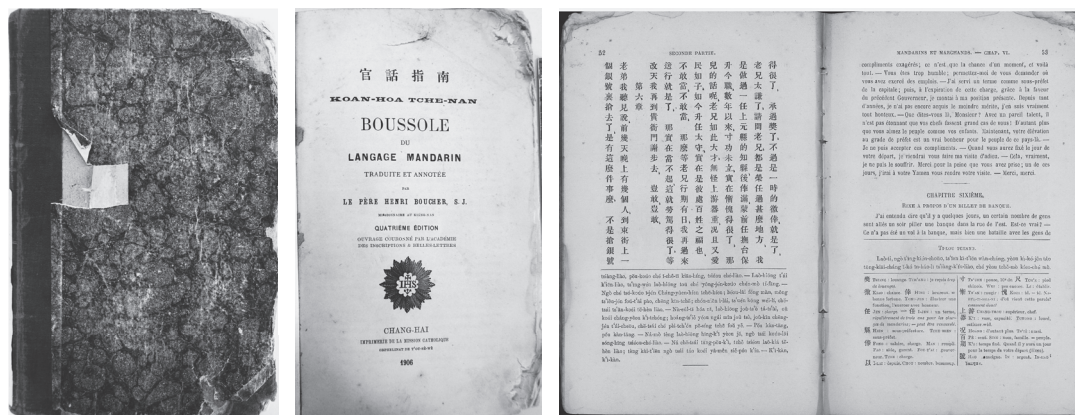
大清光緒十九年癸巳歲 九江書局活字印板

所 蔵：太田辰夫氏旧蔵書

「関西大学近代漢語文献データベース」にデジタル版を収録

備 考：序文と奥付はない。誤字、脱字も散見され、一行まるまる抜けている例も見られる。一部語彙を双行注という形で並列表記をしているのが最大の特徴である。この双行注は基本的には北京語と南方語の区別を示したものであると考えられるが、「您納」と「您」といった同義語や、「路東那個海味店的纔好哪」と「路東那個南京店的纔好」、「拿茶掃一回」と「拿条葉掃一回」のようにシチュエーションの違いによる使い分けなど必ずしも南北差とは言い難いものも双行注として記載されている例が見られる⁹⁾。

〔2〕-2 官話指南 Koan-Hoa Tche-Nan Boussole du Language Mandarin（仏語対訳版）



内田慶市氏架蔵本

編著者：LE PERE NENRI BOUCHER S. J

発行者：Impromerie de la Mission Catholique

刊 年：1887年（序文の初版の日付、1906年版による）

印刷地：Chang-hai（上海）

9) 双行注を利用したこの種の並列表記は1890年代以降の『官話類編』や『無師初學英文字』（1897年）などで見られ、意識的に南北で違う語彙を上下あるいは左右で併記している。また『華語拼音字法』（1916年）の序文には「When Northern and Southern mandarin use different characters, the author at first thought of putting the two readings side by side, but on further consideration decided that this would not be an improvement.」という記載があり、この種の方法が1890年頃から1910年代頃までは利用されていたことが分かる。

形態：洋装本、1冊、482頁、24.0×15.0cm

所蔵：内田慶市氏個人蔵

備考：フランス語対訳版、序文の記載から1887年、2版序文は1893年 4版1906年と版数を進めていることが分かる。フランス語版オリジナルの序文の他に、付録として「Vocabulire」と、時間などをまとめた「Heures chinoises」、「Cycle de soixanteans」がある¹⁰⁾。

〔2〕-3 官話指南 The guide to Kuan hua : a translation of the “Kuan hua chih nan” : with an essay on tone and accent in Pekinese and a glossary of phrases（英訳版）

編著者：L.C.Hopkins

発行者：Kelly & Walsh, LTD (Shanghai)

刊年：1895年

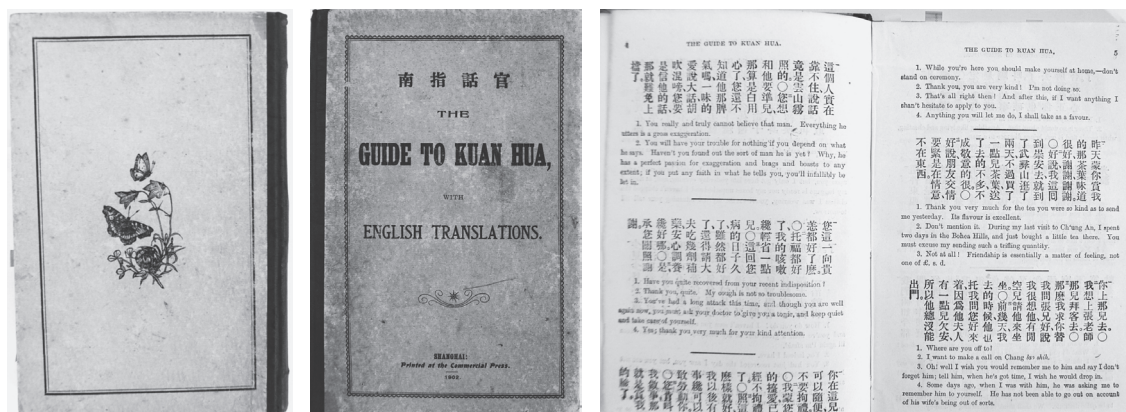
印刷地：Shanghai

形態：洋装本、194頁、25.0×17.5cm

所蔵：所蔵箇所多数

備考：英語訳と語彙索引のみ、3版（1900年）4版（1906年）5版（1921年）のように版数を進めている。本文は掲載されておらず、訳文のみの記載となる。これは序文によると転載の許可が得られなかったためであるとされる。オリジナルの『官話指南』と異なる点としては、巻末に「tone and accent in Pekinese」と「a glossary of phrases」が掲載されている。

〔2〕-4 官話指南 The Guide to Kuan Hua with English Translations（英語対訳版）



内田慶市氏蔵本

編著者：記載無

10) 1905年刊行のものとして『官話指南 Boussole du langage mandarin』（徐家匯天主教堂編、221p、22cm）というのが北京首都図書館蔵であるが未見。書名は同じだがページ数や形態が大きく異なる。また『書誌』にもフランス語版として『書目』No.19（仏訳本：1900年刊行）及び『書目』No.20（仏注釈本：1905年）が掲載されている。同系統のものと思われるが、刊年や説明を見る限りでは一致せず。

発行者：Commercial Press (Shanghai)

刊 年：1902年

印刷地：Commercial Press (Shanghai)

形 態：洋装本、4巻1冊、260頁、19.0×12.5cm

所 蔵：内田慶市個人蔵

備 考：翻訳者の記載はないがL.C.Hopkinsの訳と同じ。ただし固有名詞な英訳版と一致しないところもある。序文はなく、レイアウトは〔2〕-2に近いが、単語の注釈はない。また会話であることを示すために人が変わるところで○が挿入されている。これにより会話の切れ目が分かりやすくなっている。

〔2〕-5 改訂官話指南

編著者：呉啓太、鄭永邦、改訂者：金國璞

発行者：文求堂

刊 年：1903（明治36）年5月

印刷地：東京

形 態：洋装本、230頁、20.0×13.0cm

所 蔵：『国語学資料叢刊』燕語社会風俗官話翻訳古典小説・精選課本篇第2巻所収

備 考：初版で序文を書いた金國璞により改訂されている。巻之一「應對須知」が削除され、「酬應瑣談」が新しく加えられた。本書については後に龍文書局からも出版されている。

〔2〕-6 官話指南総訳

編著者：呉泰寿

発行者：文求堂

刊 年：1903（明治38）年1月

印刷地：東京

形 態：洋装本、264頁、22.1×14.8cm

所 蔵：『集成』第1集第2巻所収

『中国文学語学資料集成』第4集第4巻所収

備 考：改訂版に対応する日本語訳版だが、改訂の際に削除された「應對須知」の訳もついている。編著者の呉泰寿は『官話指南』編著者の呉啓太と鄭永邦のいとこである。

〔2〕-6 官話指南精解

編著者：木全徳太郎

発行者：文求堂・田中慶太郎

刊 年：1939（昭和14）年

印刷地：東京

形態：洋装本、384頁、19.0×13.0cm

所蔵：所蔵先多数

備考：『改訂官話指南』の本文を解釈したもの。

〔2〕-7 譯註、聲音重念附 官話指南自修書 官商吐屬篇

編著者：飯河道雄

発行者：大阪屋號書店

刊年：1925年（大正14）年2月15日

印刷地：大連

形態：洋装本、4, 2, 359頁、20.0×13.0cm

所蔵：関西大学東西学術研究所

『中国文学語学資料集成』第2集第1巻所収

備考：序文に本書は商務印書館版の英語対訳版である『官話指南』を翻訳して作成したと記載がある。ここで指摘されている商務版というのがおそらく〔2〕-4である。本書は3冊セットで出版されているが、それぞれの書籍に同様の記載がある。

〔2〕-8 譯註、聲音重念附 官話指南自習書 應對須知篇, 使令通話篇

編著者：飯河道雄

発行者：大阪屋號書店

刊年：1924年（大13）年5月25日

印刷地：大連

形態：洋装本、4, 2, 359頁、20.0×13.0cm

所蔵：関西大学東西学術研究所

〔2〕-9 譯註、聲音重念附 官話指南自修書 官話問答篇

編著者：飯河道雄

発行者：大阪屋號書店

刊年：1926年（大15）年2月10日

印刷地：大連

形態：洋装本、4, 2, 170頁、20.0×13.0cm

所蔵：関西大学東西学術研究所

〔2〕-10 官話指南談論新編應用問題並解答

編著者：幸勉

発行者：大阪屋號書店

刊年：1931年（昭和6）年12月8日

印刷地：大連

形態：121頁、20cm

所蔵：大阪大学外国学図書館

備考：書誌記載は大阪大学外国学図書館のオンラインカタログによる。

3. 方言学習としての『官話指南』

次に掲載するのは中国の各方言に翻訳された『官話指南』の一覧である。

〔3〕-1 土話指南 T'OU-WO TSE-N É BUSSOLE DU LANGUAGE MANDARIN TRADUITE ET ROMANAISEE EN DIALECTE DU CHANG-HAI (上海語訳版)

編著者：師中董訳注

発行者：土山湾慈母堂

刊年：1908年

形態：136頁

所蔵：『中国文学語学資料集成』第2篇 第4巻所収

備考：上海語に翻訳された『官話指南』の本文に音注とフランス語の訳が付されている。巻之四「官話問答」は訳さず。

〔3〕-2 滬語指南 (上海語訳版)

編著者：曹鐘橙菊人甫訳

発行者：上海美華書館

刊年：1897 (光緒23) 年

形態：2巻1冊

所蔵：上海図書館 (1908年版)

『中国文学語学資料集成』第3篇 第3巻所収

〔3〕-3 粵音指南 (広東語訳版)

編著者：H.R.Wells

発行者：文裕堂

刊年：1895年

印刷地：Hong Kong

形態：和装本、4巻、上下2冊、29cm

所蔵：オーストラリア国立図書館

備考：同じ名前の書籍としては『粵音指南』(聚珍書樓、1903年)『粵音指南』(別發印字館、1910年)という名称が散見できるがいずれも筆者未見。

〔3〕-4 訂正粵音指南（広東語版）

編著者：H.R.Wells

発行者：Wing Fat & Company

刊 年：1930

印刷地：香港

形 態：3冊

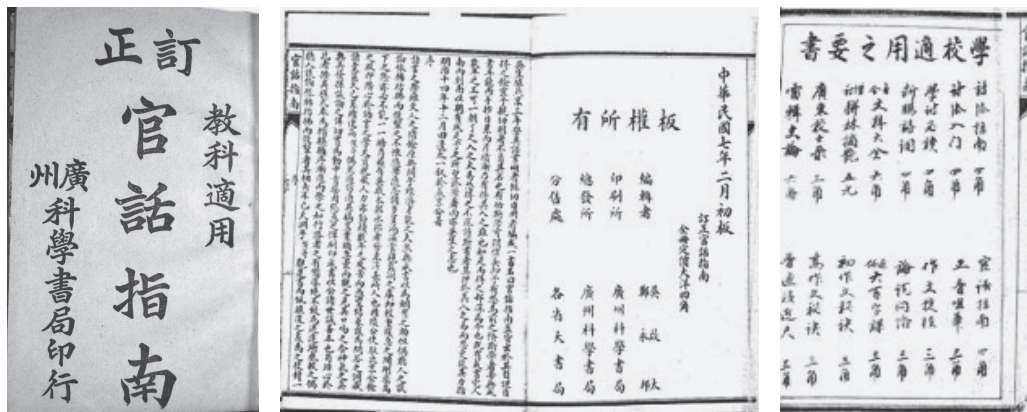
所 蔵：『中国語文資料彙刊』第1篇3巻所収

備 考：『中国語学新事典』では1929年に『粵音官話指南』が刊行されたとある¹¹⁾。

4. 国語教科書としての『官話指南』

尾崎実「『官話指南』をめぐる——明治期日中文化交渉史の一側面——¹²⁾」には「本書〔『官話指南』※筆者註〕は、日本人と西洋人に対してだけでなく、中国人にとっても北京語学習の教材であった。1918（中華民国7）年2月、廣州福芸樓書局から、『教科書適用訂正官話指南』が出版されている」という記載がある。この北京語学習の教材としての『官話指南』について、日本国内の図書館にこの書籍を蔵書しているところはなく、また国語教科書という性格上中国国内の図書館の蔵書にもならず、また尾崎文庫にもこの書籍は収められておらず、その素性はこれまでよく分からなかった。今回調査の結果この系統のテキストを四種類発見することができたので紹介する。

〔4〕-1 教科適用訂正官話指南



プリンストン大学所蔵本

編著者：呉啓太・鄭永邦

発行者：科学書局

11) 以上の書籍以外にも、「『官話指南』をめぐる——明治期日中文化交渉史の一側面」『尾崎實中国語学論集』（尾崎 實）347-348頁に、『会話指南』が紹介されている。これは『官話指南』「使令通話」8-20を漢口語訳したものとされる。

12) 『尾崎實中国語学論集』347～349頁

刊 年：1918（民国7）年2月（初版）

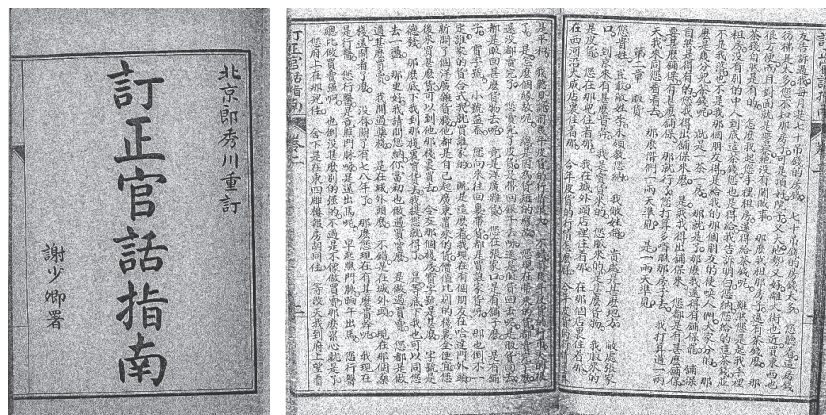
印刷地：廣州

形 態：4巻1冊、2,56丁、20.0cm、プリンストン大学所蔵のものは元は線装本だったと考えられるが現在は洋装本として再装丁されている。

所 蔵：プリンストン大学

備 考：今回資料として入手したのはプリンストン大学の蔵書本である。ハーバード大学にも同名の書籍が所蔵されている。書誌を見る限りでは同じものであると考えられる。また同名で出版社が異なるものに香港中文大学蔵（2,56丁、20.0cm、1918年、廣州書局、請求記号：PL1121.C5K8）があるが筆者未見。本書の詳細については後述する。

〔4〕-2 訂正官話指南



香港科技大学所蔵本

編著者：郎秀川重訂

発行者：不明

刊 年：不明

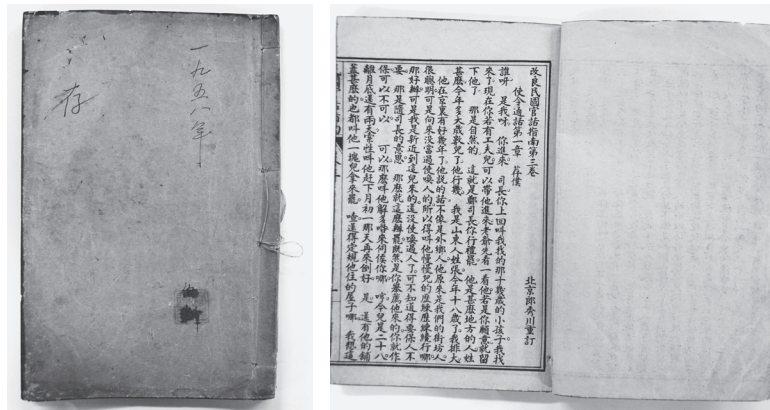
形 態：線装本、4巻2冊、8,5,（巻1-2本文30丁）、20.0cm

所 蔵：香港科技大学（請求記号：P44D561910）

備 考：同書の名前で所蔵確認ができたのは香港科技大学の所蔵本のみ、三巻と四巻が欠落している。本書の詳細については後述する。

『官話指南』の多様性（氷野）

〔4〕-3 改良民国官話指南



内田慶市氏架蔵本

編著者：郎秀川重訂（奥付には著者名として同氏の名前が記載されている）

発行者：開民書局

刊 年：不明

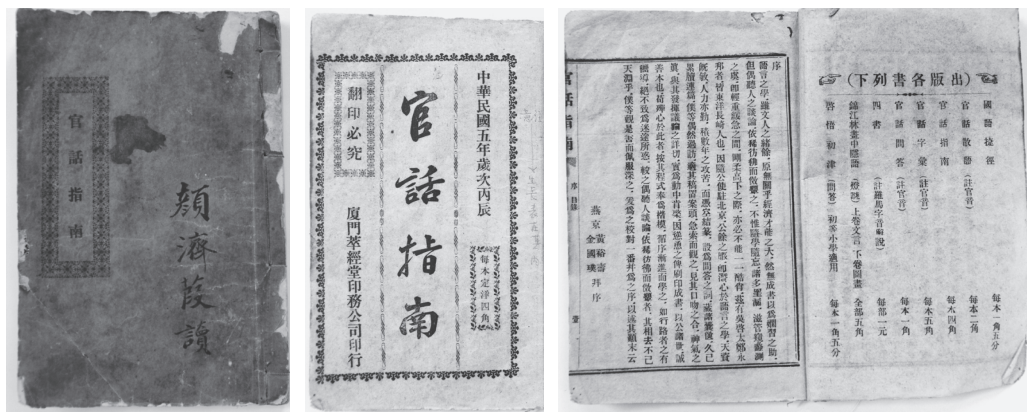
印刷地：不明

形 態：線装本、4 卷 2 冊（上巻欠）、下巻は「指令通話」15丁、「官話問答」19丁、「釋義」8 丁、
13.4×20.0cm、30行×13字。

所 蔵：下巻のみ内田慶市氏個人蔵

備 考：著作者として郎秀川という名前が見られることから、おそらく〔4〕-2 と同系統の書籍だと
考えられるが、上巻がないので比較できず。本書の詳細については後述する。

〔4〕-4 官話指南



筆者架蔵本

編著者：記載無

発行者：廈門萃經堂印務公司

刊 年：1916（中華民國5）年

印刷地：記載無

形態：線装本、53丁、13.4×20.0cm、半葉15行×30字

所蔵：筆者架蔵

備考：この書籍は一見すると〔1〕系統の『官話指南』と同じだが、中を見ていくと「国語」教育を目的として刊行されたものであることが分かる。またこれまでの「訂正」系のものとは異なり、『官話指南』という名称で出版されている。封面などはいわゆる〔1〕系統のものや〔2〕系統のものと同じである。編著者である呉啓太と鄭永邦の名前はどこにも記載されておらず、田邊による序及び編著者の凡例は記載されず、黄裕壽と金國璞の拜序のみ掲載されており、意図的に日本人が編集者であることを隠している節がある。また巻之一から巻之三までしかなく、巻之四は掲載されていない。封面の裏に廈門萃經堂印務公司から出版されている他の書籍が掲載されており、そこには『官話指南』と並んで『国語捷徑』『官話散語（註官音）』『官話字彙（註官音）』『官話問答（註官音）』『四書（註羅馬字音解説）』『錦江林晝午隱語（燈謎）上卷文言 下卷圖畫』『啓悟初津（問答）初等小學適用』といった書目が並んでいる。ここで記載されている内容から当時この出版社は国語教育あるいは小学校用の教科書を出版していたものということが想像できる。また表紙に「顔濟葭」という名前が記載されているが、いつの時代に記載されたものかまたその人物については現時点において一切不明である。

今回の調査では結果として以上の四点の「国語」学習用として印刷された『官話指南』を実際に確認することができた。廣州福芸樓書局から出版された『教科適用訂正官話指南』は発見することができなかったが、〔4〕-1『教科適用訂正官話指南』と同じ名称であること、また同じ廣州で印刷をされていることから、同じものであると考えて良いだろう。さらに、〔4〕-2『訂正官話指南』については広東か福州で出版されて利用されたもので、〔4〕-3『改良民国官話指南』が上海の書店で販売されていたこと、〔4〕-4『官話指南』が廈門の会社から出版されていることから、いずれも非官話地域における「北京語」あるいは「国語」の習得が目的で使用されていたということが推察される。次章でこれらの各書籍についてもう少し具体的な検証を行う。

三. 国語教育として利用された官話指南

1. 〔4〕-1『教科適用訂正官話指南』の詳細

本書は1918年2月に初版が刊行され、呉啓太・鄭永邦が著者名として記載されているのみで、訂正者の名前はない。主に広東を中心に販売使用されていたと考えられる。

『教科適用』は「學校適用之要書」シリーズの一冊として出版されている。巻末に掲げられるシリーズに収録されている書名は「討法指南」「討法入門」「學討必讀」「古今文料大全」「増訂駢林摘艷」「廣東校士録」「雷輯史論」「官話指南」「正音咀華」「作文捷徑」「論說問路」「通俗六百字課」「初作文秘訣」「高作文秘訣」「普通淺近尺」などである。「正音咀華」のような音声を学習するものや「通俗六百字課」のように識字学習用教材と思われるもの、「初作文秘訣」のように作文学習用のものと国語教育の一環とし

て利用されていることが分かる。ただこれらの「學校適用之要書」シリーズについては、本書以外の掲載書籍のすべての所蔵先が不明で入手することができなかった。

序文は『官話指南』の原書にあるものがそのまま付されており、「訂正」と名前がつけられるだけあり、〔1〕系統の『官話指南』からいくつか文字の訂正が行われている。以下に巻一の訂正点を掲げる。

〔訂正箇所〕（巻一のみ例示、〔1〕-1『官話指南』との比較）

〔1〕-1『官話指南』→〔4〕-1『教科適用訂正官話指南』

恭喜在哪儿→恭喜在那儿

我在通州做買賣我和你令叔相好→我在通州做買賣我却你令叔相好

您要是信他的話那就難免要上檔了→檔要是信他的話那就難免要上您了

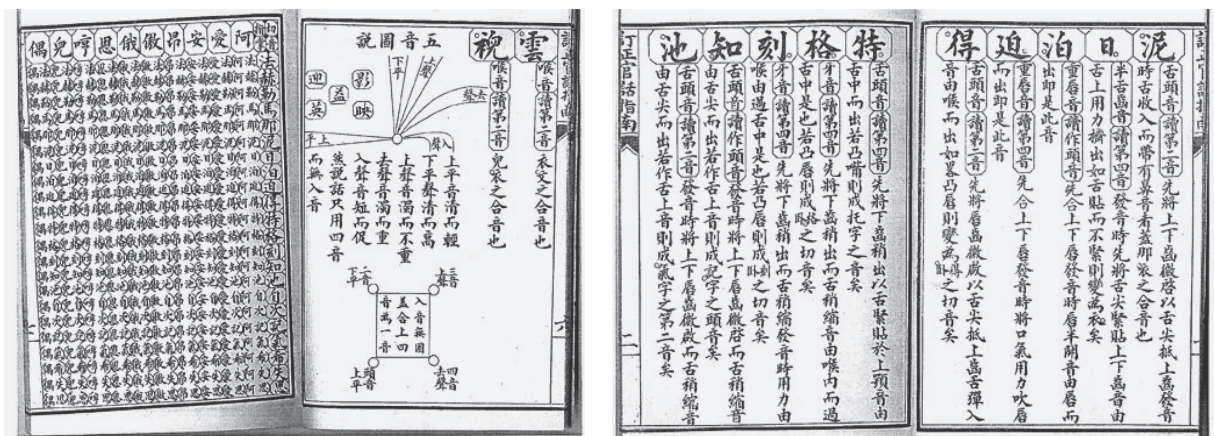
凡人說話總要實誠→凡人說話總要誠實

你喜歡那季兒→你歡喜那季兒

訂正箇所については分量的にはそれほど多くない。

2. 〔4〕-2『訂正官話指南』の詳細

刊年の記載がないが、1900～1920年前後頃までに刊行されたと考えられる¹³⁾。重訂者として郎秀川の名前があがっており、さらに謝少卿による題字がある。入手したテキストは巻三と巻四が欠落しているが、目録上では巻一から巻四まであり、二冊構成であると考えられる。〔4〕-1『教科適用訂正官話指南』と異なるのは、序文がなく、最初に音韻についての説明があり、反切法を使って中国語の音を表し、声調については文字の四隅に圈点を打つという明治日本で使われた方法が紹介されている点である。



『訂正官話指南』の音韻解説

次に巻一の訂正箇所を列举する。

13) 後述の『最新官話捷中捷』と音韻の説明箇所が全く同じ形式で作成されているため。

〔訂正箇所〕〔1〕-1『官話指南』との比較

〔1〕-1『官話指南』→〔4〕-2『訂正官話指南』

賤姓吳→敝姓吳（1-1）

還沒掇好了→還沒掇好（1-4）

那箱子也還沒打開了→那箱子也還沒打開（1-4）

您要是信他話→您要信他話（1-6）

好說我這回道崇安去→豈敢我這回道崇安去（1-9）

他也托我問您好來着→他也托我問你好來着（1-10）

因爲他夫人有一點兒欠安→因爲他夫人有點兒欠安（1-10）

凡人說話總要實誠→凡人說話總要誠實（1-11）

照你這麼說→照他這麼說（1-13）

您納一塊兒搭伴兒去→您一塊兒搭伴兒去（1-14）

這時正晌午→這時候正晌午（1-24）

看見瓦上的霜厚的很→看見瓦上的霜厚得很（1-25）

我喜歡春秋兩季→我歡喜春秋兩季（1-27）

聽說你上學房在那兒啊→聽說你上學堂念書（1-28）

那門口有報子掛着→那門口有牌子掛着（1-29）

講書極細心→講書很細心（1-30）

改詩文很用心→改策論很用心（1-30）

種甚麼都不長→種甚麼都不長了（1-31）

我特意來拜壽→我特意來拜壽呢（1-32）

千萬別推辭→千萬勿推辭（1-32）

我不能像別人家竟會要馬前刀兒，溜溝子臭嚼，幹那些下賤營生→我不能像別人有縫兒

我不能像人家竟要馬前刀兒溜溝子棒臭脚幹那些下賤營生我是來不及的→我不能像別人有縫兒就鑽一味兒卑鄙無恥我是來不及的（1-34）

做好官的皇上一定喜歡→做好官的百姓一定喜歡（1-35）

如今的作京官大人們都好→如今作老前輩們都好（1-36）

他是個期軟怕硬的草雞毛→他這人本來沒眼神兒說話又不知輕重（1-37）

你老別理他→你老不理他（1-37）

訂正箇所は〔4〕-2に比べて大幅に増えていることが見て取れる。

3. 〔4〕-3『改良民国官話指南』の詳細

この書籍では著者として郎秀川の名前が掲載されている。郎秀川の重訂なる〔4〕-2『訂正官話指南』は巻一と巻二、本書は巻三と巻四しかないため修正箇所の直接の比較はできない。奥付で上海の各書房にて販売と掲載されていることから、上海で使用されていたと考えられる。また本文の「改良」とは別

に、曹生氏編なる「改良民国官話指南釋義」と題された語彙注釈があるほか、各章に題名が追記されているという点が他のものと異なる。以下参考までに巻3「指令通話」の一部の修正箇所について記載する。

〔訂正箇所〕（巻3の1）〔1〕-1『官話指南』との比較

〔1〕-1『官話指南』→〔4〕-3『改良民国官話指南』

老爺您上回叫我找的那十幾歲的小孩子→司長你上回叫我找的那十幾歲的小孩子

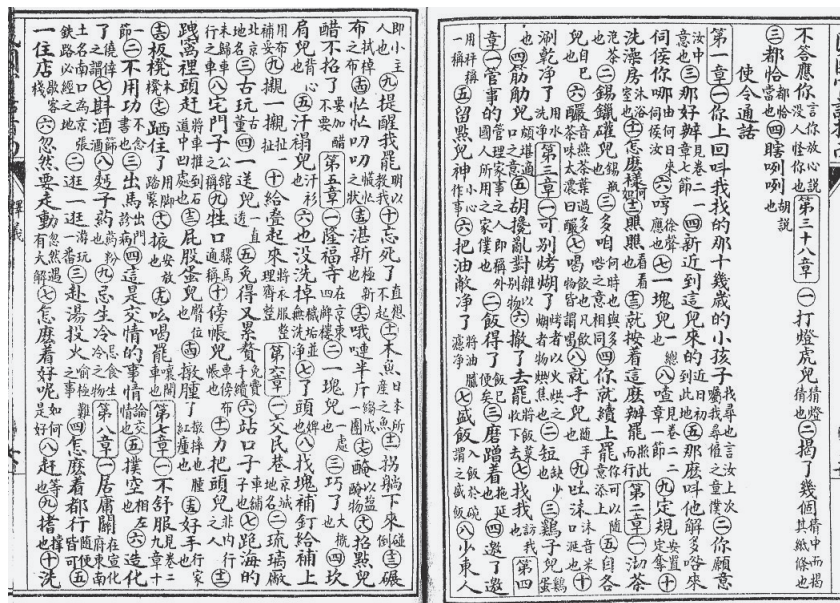
若是您願意就留下→若是你願意就留下（3-1）

可是向來沒當過跟班的→可是向來沒當過使喚人的（3-1）

老爺是要沏甚麼茶→你老是要沏甚麼茶

你沒瞧見昨兒個吳少爺喝茶→你沒瞧見昨兒個吳先生喝茶

修正箇所としては人の呼称に関するところが多いように思われる。その意味では〔4〕-2よりも修正箇所が限定的である。ただし、この書籍には巻末に『改良民国官話指南』釋義という注釈がついている。この注釈は当時この書籍を利用した人にとって分かりにくい表現に対して個別に発音や単語の説明を加えており、資料的価値が高いように思われるので、別稿において検討を加えることとする。



『改良民国官話指南』釋義

釈義の種類としては次のような種類におおよそ分類できる。

※語釈対象語／語釈（語釈対象語の掲載箇所）の順番に記載

〔単語の意味に関する説明〕

和／同也（應對須知第3節）

可不是麼／正是也（應對須知第5節）

一盪／一回也（官商吐囑第2節）

公館／公使館也（官商吐囑第5節）

不咖了／不必也（官商吐囑第7節）

一棵／一株也（官商吐囑第9節）

晌飯／午飯也（官商吐囑第9節）

死鬼／死人也（官商吐囑第14節）

自各兒／自己也（使令通話第2節）

自各兒／自己也（使令通話第2節）

苦力／傭工也（使令通話第14節）

官名／即官印官章（應對須知第3節）

您納／尊稱（應對須知第1節）

〔発音に関する説明〕

他納／他音攤背後稱長輩詞（官商吐囑第27節）

了／凡了字皆官話虛字不讀蓼悉讀拉（應對須知第2節）

兒／凡兒女之兒宜單讀餘皆官話腔調尾音宜與上一字連合其音兩字合一字音讀（應對須知第2節）

還／凡往還與還債之還讀還此則官話虛字作仍字解音孩（應對須知第3節）

大夫／大音帶醫生也（應對須知第5節）

他們三人／三音薩不讀參（官商吐囑第27節）

〔南北の差に関する説明〕

今兒早起／北京稱今日明日日後日爲今兒明兒前兒後兒今兒早起言今日早上也（應對須知第4節）

臉／北人謂面曰臉（應對須知第5節）

那宅裡／北京問人那家皆說那宅裡（使令通話第18節）

北人謂作工曰做活（應對須知第39節）

耳朵／北人稱耳爲耳朵（應對須知第16節）

〔固有名詞や地名などの説明〕

東單牌樓／地名

海淀／地名近頤和園

琉璃廠／北京地名

四喜／亦戲班名

哈喇／外國呢名

ここで〔4〕-2『訂正官話指南』に関連して『最新官話捷中捷』（香港科技大学図書館蔵）という書

籍について簡単に紹介しておく。本書は「国語」教育を目的として『訂正官話指南』の重訂者である郎秀川が編纂したものである。入手した資料は民国十年仲冬月（1921年）に上海書局から出版された石印本である。この書には榕南漢英書院の教員の序が付されており、その記載から、郎秀川は北平出身で、北京景山官学・榕南聖會書院にて国語教員をしていたことが分かる。この序文は1910（宣統2）年に書かれたものである。また本文に

咱們福建人一百人中間纔有兩三個人會說官話一千人中間纔有幾十個會說官話有時候幾百人也沒有一個人會說官話（巻1-7a）

とあることや、榕南漢英書院の「榕南」が福州の地名であることから福建の福州で使用されていた教材であると推測できる。またこの書籍の最初にある音韻の説明は『訂正官話指南』と同じあるため、この二つの教材が同じ地域で使われていたということが推察できる。この教材の序文には当時（1910年）の国語教材には『官話指南』か『官話捷訣』の二冊しかなかったと記されており、少なくともこの教材が使われていた地域では『官話指南』が幅広く「国語」教材として用いられていたことが推察できる。

本書の構成は四巻一冊、線装、20cm、巻一の4aの版心には「宏文閣校印」とある。『官話指南』と異なり、脈略のない問答スタイルではなく、話の内容を分類し掲載している。

話套	數目	天文	時令	地理	宮室	器用	衣服	飲食
身體	花木	果品	禽獸	鱗介	昆蟲	農田	百工	人倫
婚姻	人品	文具	武備	首飾	戲玩	疾病	官場	口氣
文人吐屬		買賣問答		賓客套語		閨閣常談		

この教材に掲載されているテキストについての詳しい考察は別稿に譲るが以下の例のように『官話指南』と内容が類似する箇所が散見される。

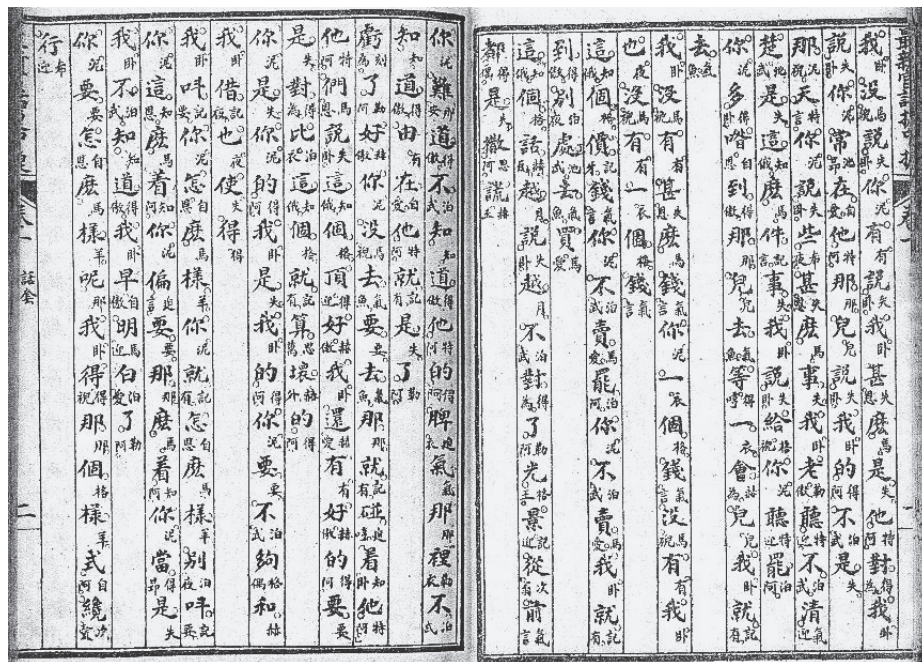
你看一年四季那一季兒好（『最新官話捷中捷』巻1-13a時令）

你看四季的時候、那一季兒好（『官話指南』「應對須知」27）

我還沒洗臉把我的臉盆打了臉水拿我的臉布和漱口走盂兒牙刷子來（『最新官話捷中捷』巻2-5b器用）

誰叫門了。老爺天不早了、你快起來罷。哼、你打洗臉水來罷。洗臉水打來了、漱口水也倒來了、胰子盒兒在臉盆架子上擱着哪。刷牙散在那兒了。是在那張桌子的抽屜裏、和刷牙子在一塊兒了。把擦臉手巾拿來。是。（『官話指南』「指令通話」3）

また、本書の最大の特徴としてあげられるのは、全ての漢字に対して反切による注音がなされている点である。以下に参考までに図を掲載する。



『最新官話捷中捷』の音註、香港科技大学所蔵本

四. オーストラリア国立図書館蔵『官話指南 Guan hua zhi na』

今回の一連の調査の過程でオーストラリア国立図書館の蔵書目録を調査したところ「官話指南」(Manuscript)という書名が掲載されていた。そこでこの書籍を取り寄せてみたところ、『官話指南 Guan hua zhi nan』と記された写本のコピーが届いた。この書籍について簡単に概要を紹介する。

本書は、「On her majesty's service」と書かれた封筒に入れて保存されており、封筒の表に手書きで「官話指南 Kuan hua Chih nan」Mss. Loose 8 leaves. (10 lesson) と記載されている。この封筒がいつものかについては不明。

構成としては、第一章：官場問答、第二章：朋友問答、第三章：師生問答、第四章：買賣問答、第五章：家常問答、第六章：泛常問答、第七章：主僕問答、第八章：長者問答、第九章：邂逅問答、第十章：市井問答のように「〇〇問答」という題名の問答スタイルの会話からなる。内容面で『官話指南』と一致する箇所はないように思われるが、「在香港住了三個多月，七月裡到上海，住了半年，昨天纔到這裡」(第二章朋友問答)、「你姓甚麼，小的叫洪禧，你是那裡人，小的北京人，多大了，二十八歲」(第七章主僕問答)などの記載と「金臺書院」(第五章家常問答)という北京に同名の書院があるので、おそらく北京と関連がある人が官話を学習するためのテキストであると推察できる。今後詳細に考察を加えていく必要がある。

おわりに

本論は個別の資料を整理し紹介することに主眼を置いているため、掘り下げた検討は行っていないが、以下の点について言及することができるのではないだろうか。

まず『官話指南』の版本はこれまで考えられていた以上に多様であり、日本人が作成した中国語教材がこれほど多くの版本として利用されていることは注目に値する。

さらに外国人にとっての中国語学習書として刊行されてから30年ほどたった後に、本書を中国人が「国語」学習あるいは「北京語」学習用として利用していたということである。日本人が著したとされる『官話指南』が当時の中国人を対象とした教育に用いられたかについては、1882年に刊行された『官話指南』が当時の「北京語」を忠実に表した会話書であったためであると考えられるが、それだけでは説明できない部分が多い。この点については本論では明らかにしていないが、この理由の一端について、改訂版で消された「應對須知」の来歴を考察することでその理由の糸口を見出すことができると筆者は考えている¹⁴⁾。

今回の調査で新たに提示できた資料として『教科適用訂正官話指南』、『訂正官話指南』、『改良民国官話指南』、『官話指南』（廈門萃經堂印務公司版）『最新官話捷中捷』『官話指南 Guan hua zhi na』（オーストラリア国立図書館所蔵）があるが、国語教科書として利用された四冊については今後さらに詳細な調査を行い、どのような目的で訂正が行われていたのか、またどのような環境で利用されていたのかなどを明らかにしていきたい。

14) 2009年12月に開催された中国近世語学会において、筆者は『官話指南』「應對須知」について口頭報告を行った。その報告では、国語教科書として出版された『官話指南』についてその資料的価値に言及し、国語教科書として利用された理由について、『改訂官話指南』で削除された「應對須知」の来歴を探ることから考察を加えた。結果「應對須知」の一部分が『正音撮要』「問答」の内容と酷似しており、『官話指南』が「正音」教材の流れの上に位置付けることができる可能性があり、このことが国語教育に利用される一因であると指摘し、そのことが同時に、『改訂官話指南』における該当箇所の削除理由の一つとして考えられると指摘した。

